

UNION Foundation For



公益財団法人 ユニオン造形文化財団
2025(令和7)年度 事業内容報告書

Ergodesign Culture

UNION Foundation For Ergodesign Culture
Annual report 2025

2025

CONTENTS

02 ごあいさつ

03 ユニオン造形文化財団 組織

04 財団の概要

05 調査研究 助成

11 国際交流 助成

13 在外研修 助成

15 第32回ユニオン造形デザイン賞

ごあいさつ

Greetings



公益財団法人 ユニオン造形文化財団
理事長 立野 純三

空間造形デザイン分野における各種活動支援の為の助成並びに優れた創作活動の顕彰を行い、芸術文化の発展への貢献、そして国内にとどまらず広く世界へ開かれた当財団の活動も、おかげさまで32回を迎えました。今回も世代をこえて各界より多数のエントリーをいただき、誠に喜ばしい限りです。

本年度の助成活動に関しましては安藤忠雄先生をはじめとする選考委員の方々の厳正な審査により、調査研究部門6件、国際交流2件、在外研修2件の計10件に対して実施させていただきました。

また、顕彰事業の第32回ユニオン造形デザイン賞公募に関しましては関西学院大学建築学部教授、京都繊維大学名誉教授の米田明先生に審査員をお願い「つながる建築」という興味深いテーマを頂きました。これをテーマに多くの優秀な作品の応募があり、受賞が決まり喜ばしい限りです。

これからも我が国の芸術文化の発展への一助となるよう、活動を続けていく所存です。

どうか今後とも温かいご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2026年2月

ユニオン造形文化財団 組織

■役員

理事長 立野 純三 (株)ユニオン 代表取締役社長

常務理事 小川 進吾 (一財)産業医学研究財団 理事長

理事 山本 博史 (株)小倉屋山本 代表取締役社長
吉本 晴之 (株)大阪マルビル 代表取締役社長

監事 武本 勝司 武本公認会計士事務所 公認会計士・税理士
南川 和茂 南川和茂法律事務所 弁護士

■評議員

嘉納 秀一 三宝電機(株) 代表取締役会長
小林 隆太郎 (株)あみだ池大黒 代表取締役会長
長谷川 恵一 学校法人エール学園 総長
吉川 秀隆 タカラベルモント(株) 代表取締役会長兼社長

■選考委員

安藤 忠雄 建築家・東京大学 特別名誉教授
絹谷 幸二 画家・東京芸術大学 名誉教授
豊口 協 長岡造形大学 名誉教授
古山 正雄 京都工芸繊維大学 名誉教授
蓑 豊 兵庫県立美術館 名誉館長・公益財団法人香雪美術館 館長
松村 秀一 神戸芸術工科大学 学長

■事務局長

柴田 昌宏

財団の概要

- 名 称 公益財団法人ユニオン造形文化財団
- 所 在 地 事務局／〒550-0015 大阪市西区南堀江2丁目13番22号
TEL.06-6532-8764
- 設立年月日 1994年5月24日

■主務官庁 内閣府

■目 的 空間デザイン文化の振興と向上を図るため、同分野に関する調査研究及び国際交流に対する助成を行うとともに、同分野の優れた創作活動の顕彰を行い、もって我が国芸術文化の発展に寄与することを目的とする。

■業 務 内 容 空間造形デザインに関する調査研究及び
国際交流(若手芸術家の在外研修を含む)に対する助成
空間造形デザインで優れた創作活動の顕彰
その他目的を達成するために必要な事業

■事業一覧 2025(令和7)年度

| 助成・顕彰 | 件数 | 金額 |
|-------|----|----------|
| 調査研究 | 6 | 8,958千円 |
| 国際交流 | 2 | 2,000千円 |
| 在外研修 | 2 | 3,600千円 |
| 顕 彰 | 6 | 2,500千円 |
| 計 | 16 | 17,058千円 |

藤田 大輔

Daisuke Fujita

亀橋技術科学大学
建築・都市システム学系
教授

●共同研究者

亀屋 恵三子

豊田工業高等専門学校 建築学科 准教授

●研究課題

特別な配慮が必要な発達障がい児の遊び実態を把握するとともに、他者との交流様態を把握し、発達障がい児が遊び込むための保育環境のあり方をアクションリサーチ1)の手法を取り入れて研究する。そのため、1) 発達障がい児が遊ぶ際の具体的なニーズを明らかにし、2) そのタイプに応じた保育環境整備手法を導き出すことを目指す。本研究は、第一段階として、インクルーシブ保育2)に力を入れている園において、主に3タイプの空間構成を有する保育施設のコーナー構成と活動実態を把握する。次に第二段階として、園に選定してもらった発達障がい児の具体的な遊び方や、他者との交流様態を把握し、何が問題でどのように遊ぶことが求められているか把握する。最終的には、特別な配慮内容を類型化し、その特性に応じた遊び環境のあり方を提示する。

1) アクションリサーチとは、当事者自身が提起された問題に対して、研究者が当事者とともに協働で問題解決の方法を具体的に検討し、解決策を実施し、その検証を行い、実践活動内容の修正をおこなうプロセスを継続的におこなう調査研究活動のことを指す。

2) インクルーシブ保育とは、年齢や国籍、障がいの有無に関わらず、多様な背景を持つ子どもを同じ空間で受け入れ、全ての子どもが個々に必要な援助を受けながらいっしょに成長できる保育を指す。

■主題

アクションリサーチ手法を用いた保育施設における発達障がい児の遊び実態と他者との交流様態

■研究計画の概要

(1) 研究の目的及び意義とくにその特色とする獨創性

[研究の目的及び意義]

近年SDGsの基本理念である「誰一人として取り残さない」ために、集団生活に困難さを抱えている子どもについて、支援などのソフト面とそれに対応する環境や建築などのハード面を構築する必要がある。保育施設でも、特別な配慮が必要な園児に対応できる空間が求められているが、その在り方は、まだその緒についたばかりである。

日本における発達障がい児の数は増加傾向にあり、保育施設に通う発達障がい児も増加している。しかし、他者とのコミュニケーションが難しい発達障がい児は、その保育に職員が付き切りになることもある。また、発達障がい児が孤立したり、他者とトラブルを起こす姿も散見される。これらは、発達障がい児がきちんと遊び込めていないことが一因と思われる。

本研究では、異なる保育室形態の3園における発達障がい児に着目し、2つの行動観察調査より「遊び」の実態と環境改善による「遊び込み」の効果を明らかにすることを目的とする。

①環境改善前：遊び実態や他者との交流様態を把握する。②環境改善後：①より問題点を整理し、遊びコーナーの環境改善を実施することで、発達障がい児の遊び様態の変化と環境改善の効果を検証する。

[特色とする獨創性]

本研究は、行動観察調査により発達障がい児の特性に応じてより豊かに遊べるコーナーのあり方を研究し、実際に環境を変えてみた後に行動観察を実施し、その有用性を検証する。また、調査対象園は、応募者が設計した園を含み、設計した空間を検証することも兼ねている。一方、建築設計者は、その設計物・空間について事後評価を行うことが難しい。そのため、研究成果の波及効果としては、1) 設計した後のユーザー評価、2) 設計した空間の検証、3) 次の設計・計画につなげるサイクルをつくり出す、などの手順を経るケーススタディを確立できる。すなわち、今後の建築設計・計画について建築物をつくるだけではなく、より良い使い方や、設計後の環境構成の変遷を読み解くための一石を投じることにつながる。また、設計者が行動観察を実施することで、設計で一区切りとなっていた設計・監理の職能についても、今後のあり方や課題などについて整理できる。

(2) 実施計画の大綱

[研究内容]

調査対象3園において行動観察調査を実施する。5分毎に平面図に記録し、園児たち全体の動きを把握するとともに、あらかじめ選定してもらった発達障がい児2名に対し、その動きに着目して分析する。いずれの園も過去に行動観察調査を実施しており、予備調査は終了している。

[スケジュール]

※研究遂行にあたり、本学倫理委員会に諮り、許可されてから研究を開始する。

4月：3園について調査対象園児を複数人選定してもらい、その情報を整理して、対象園児を決定する。

5～6月：調査対象園児の行動観察調査を実施する。合わせて、全体の園児の動きも把握し、対象園児の遊び方の位置付けを行う。

7～8月：得られた結果を分析し、3園それぞれに求められる環境セッティングを提案する。

9～10月：3園に向向き、調査対象園児の動きも想定した遊び環境に改善するため、適宜家具配置やコーナー配置を変更する。

11～12月：再度調査対象園児の遊び方を中心に行動観察調査を実施する。

1月以降：学会発表および論文投稿のため、分析作業を進める。

[調査対象園]

保育施設の平面計画を鑑み、調査対象は次に示す3園である。いずれも過去に行動観察調査を実施しており、活動全体と保育環境の対応については把握している。1) 保育室完結型(FK園)、2) 一室空間型(TK園)、3) 空間連続型(SS園)の3園である。調査対象園児により環境セッティングは異なると思われるが、この研究の知見を活かすために、現在保育施設で採用されている平面タイプを網羅する必要があると考え、3つの異なる平面タイプを選定している。



(3) 研究成果の公表予定

研究成果は、研究期間が終了した次年度の人間・環境学会大会にて口頭発表を行い、そのコメントを受けて査読論文に投稿する予定である。研究の進捗状況は、当研究室のホームページやSNSなどで定期的に情報公開するとともに、シンポジウムや講演、書籍執筆等の機会がある場合は、積極的に発信をしていきたい。また、本研究の成果は、現在依頼されている子ども園(令和8年度開園予定)の設計に活かすことを考えている。そのため、研究成果を設計に活かすサイクルが短期間であることと、助成を受けた事実を広くPRできることが特長である。

陶器 浩一

Hirokazu Touki

公立大学法人 滋賀県立大学 教授

●共同研究者

竹田 明夫
株式会社 竹田木材工業所 会長
宇都宮 直樹
近畿職業能力開発大学校 教授
松岡 亘
近畿職業能力開発大学校 教授
奥村 英史
木々のや 代表取締役

●研究課題

本研究で開発するものは、竹集成材を用いた「三方格子構法」による組みばらし自由な可変建築構造システムの実用化である。竹は自然素材としては極めて強度が高く、それを活かせば極めて繊細な架構を実現できる。建築基準法の指定材料ではないが、研究者らの研究成果をもとに基準強度の構造評定を取得した竹集成材ドームが実現する。また、研究者らが開発した、一定の間隔で相欠き加工を施した角材を三方向に組み上げてゆく「三方格子構法」は、釘も金物も用いず手作業で組み上げることができ、同じシステムの展開なので連結・展開してゆくとことができ、解体や移設も自由にできる。今回開発するものは、18mm角材を用いた可変建築構造システムの実用化であり、本システムを一般化するために以下の研究を行う。

- ① 18mm角三方格子架構の構造性能確認試験および解析的検証、設計法の確立
- ② 一貫した設計・施工システムの構築
- ③ 可変性のある小建築（茶室を想定）の建設（実建築物として大臣認定につなげたい）

■主題

竹集成材を用いた「三方格子構法」による組みばらし自由な可変建築構造システムの開発—新しい”和”の空間—

■研究計画の概要

(1) 研究の目的及び意義とくにその特色とする獨創性

建築構法の大家である故・内田祥哉博士は、ふすまや障子の開閉で空間の大きさや外部との関係が変わる「可変性」と、そのための各エレメントを通じて統一されたモジュールが和風建築の最大の特徴であると述べ、また、全ての接合部を摩擦だけでとめる、解体組み立ての繰り返し可能なアルミニウム可動間仕切りシステム[V-FRAME]を開発した。研究代表者も構造実験等でこの開発のお手伝いをしたことがあるが、その時に「これからの和風建築は、構造体や空間形そのものが変化する“可変建築”だよ。」と仰られた言葉が心に残っている。本研究で開発するものは、竹集成材を用いた「三方格子構法」による、組みばらし自由な可変建築構造システムの実用化である。竹は建築基準法に定める指定材料でないため建築構造材としては使用できないが、鉄の1/3の引張強度があり自然素材としては極めて高い材料特性を有しているため、その特性を活かせば極めて繊細な架構を実現できる。一方、材料特性に応じた接合部を開発しなければその特徴を活かすことが出来ない。研究者らは、平成31年度ユニオン造形文化財団の助成を得て、30mm角の竹集成材を立体的に組み立てた「三方格子」と薄平板を格子状に組んだ「格子シェル」の組み合わせによる建築システムのプロトタイプの開発を行った。（研究課題名「竹の材料特性を最大限活かした新たな構造システム及び特徴ある建築デザインの開発」）その後、竹集成材を用いた構造材の基準強度設定のための実験的研究を重ね、その成果で日本建築総合試験所の性能評価を得て我が国初の竹集成材ドーム建築が実現することとなり（大阪万博2025：ブルーオーシャンドーム（設計：坂茂建築設計）、竹集成材を主構造とした建築構造の実用化への道が拓けた。また、「三方格子構法」は一定の間隔で相欠き加工を施した角材を三方向（立体的）に組み上げてゆくもので、釘も金物も用いず手作業で組み上げることができ、同じシステムの展開なので連結・展開してゆくとことができ、解体や移設も自由にできるものである。平成31年の助成を得てプロトタイプの開発を行ったあと、展覧会（WHAT MUSEUM「感覚する構造」）での展示会場や茶室など小空間をつくってきた。今回開発するものは、より繊細な18mm角材を用いた可変建築構造システムであり、今までの研究実績を発展させ、一貫した設計・施工システムを構築し、確かな技術として確立する予定である。研究成果をもとに、まず可変性のある小建築（茶室を想定）を実現させ（国土交通大臣の認定（建築基準法に定めのない特殊な建築材料や構造方法等について）を取得）一般化および実用化につなげたい。本構造で開発する建材は大きな設備投資をすることなく安定した品質を持つ工業製品として竹を使用することができるので、一般化・普及化が可能である。建築材として多く用いられるようになれば、竹の有効利用につながり、ひいては放置竹林問題や低炭素社会の実現にも貢献できると考える。

(2) 実施計画の大綱

本研究は、竹集成材を用いた18mm角材を主材料とする「三方格子構法」による組みばらし自由な可変建築構造システムの実用化と一般化にあり、そのために以下の研究開発を行う。

- ① 18mm角三方格子架構の構造性能確認試験および解析的検証、設計法の確立
 - ② 一貫した設計・施工システムの構築
 - ③ 可変性のある小建築（茶室を想定）の建設（実建築物として大臣認定につなげたい）
- ① 18mm角三方格子架構の構造性能確認試験および解析的検証、設計法の確立
竹は建築基準法に定める構造材ではないが、我々は基準強度設定のため実験的研究を重ね、性能評価を得て竹集成材ドームが実現することとなり、竹集成材を主構造とした建築構造の実用化への道が拓けた。本開発では、18mm角材を用いた三方格子接合部および架構の構造性能確認試験および解析的検証を行い、構造性能を明らかにし、設計書を提案し実用化に供するものとする。集成材の原板（マザーボード）が18mm厚であり、材の歩留まりと架構の繊細さを考慮して18mm角を基本とした。木では材料強度が不安定になるが、竹集成材ではばらつきが少なく安定した性能を得ることが出来る（上記基準強度を定める実験で確認している）。また本システムで建築可能な最大限の建築の試設計を行う（下図左）。
- ② 一貫した設計・施工システムの構築
三方格子構法は、本調査研究助成を得てプロトタイプの開発を行ったあと、展覧会（WHAT MUSEUM「感覚する構造」）での展示会場構成や、茶室など小空間をつくってきた（下図中）。これらでは、3次元モデルによる形状検討→部材接合部ディテールを精査して形状修正→部材図を作成→長さ方向の歩留まりを考慮して原板からの材取り組み合わせを検討→施工手順を検討し、材を並べ替え→組み立て、という手順で各工程を試行錯誤的に進めた。本研究では3Dモデリングシステムを用いて接合部条件を与えた上で自動的に形態を生成できるアルゴリズム、歩留まりよく材取が出来るシステムを構築し、部材数が多く複雑になっても容易に施工できる、一貫した設計・施工が行えるシステムを構築する。
- ③ 可変性のある小建築（茶室を想定）の建設
①、②を元に、可変性のある小建築を建設する（下図右）。実際に建設してはらした後、場所と形態を変えて移設構築したい。小建築ではあるが、実建築物として大臣認定につなげたい。



(3) 研究成果の公表予定

研究成果については、日本建築学会大会（技術的内容については学術講演、構法および実建築については建築デザイン発表会）において発表するほか、日本建築学会技術報告集等学術論文誌に投稿する予定である。制作した小建築については広く公開し、建築雑誌、インテリア雑誌等にも広報する予定である。また、制作物の建築化に際しては、国土交通大臣の認定（建築基準法に定めのない特殊な建築材料や構造方法等について）を取得し、その内容についても公表してゆきたいと考えている。

芦澤 竜一

Ryuichi Ashizawa

滋賀県立大学 環境科学部 環境建築デザイン学科
教授

●共同研究者

渡邊 大志
早稲田大学 建築学科 准教授

●研究課題

本研究は、沖縄県北部に位置し、世界自然遺産である豊富な自然と、縄文時代より続く優れた文化を有するやんばる地方3村(国頭村、東村、大宜味村)を対象に、村人の細やかな記憶(歴史)の蓄積「むらやし」を調査・収集し、「むらやし」を介して集落・村間の垣根をこえたネットワークを形成し、相互補助的に各集落に還元される形で収益を上げる新しい集落空間である「NEW やんばる」を構想し、実践するための基盤を作ることが目的です。

本研究の意義は、少子高齢化に伴う人口減少により、祭事や共同売店運営など、様々な事柄の担い手が不足し、集落運営が困難に陥っているやんばるの集落を救うことにあります。身体的な体験によって得られた村落の魅力や特色は、本質的に村落を理解することに繋がり、地方移住やUターン、1ターンといった政策に貢献します。また建築空間を通して、子供たちが自分の村落の魅力を再発見し、地域貢献を考える次世代の担い手づくりにもつながります。2022年度から沖縄県国頭村と那を対象として調査と建築活動を行っており、与那を拠点として今後はやんばる地域での活動を予定しています。

■主題

「むらやしプロジェクト」-村人の記憶「むらやし」の集落空間化に関する研究、「New やんばる」構想による沖縄県北部のヤンバル地域におけるまちづくりの実践を通して-

■研究計画の概要

(1) 研究の目的及び意義とくにその特色とする獨創性

(1)-1 研究の目的と意義

本研究が定義する「New やんばる」とは、2022年度より研究活動を行ってきた沖縄県国頭村と那地区における交流拠点施設「よんな〜館」の改修をはじめ、各集落に点在する「空き家の改修」や、集落毎の「ツリーハウス型施設」の建設を通じ、五感で自然を感じながら、文化や伝統に触れる体験型の宿泊施設の制作や、「移動式共同売店」の建設・運用により、集落間を巡回しながら生活サポートを行うことを想定し、それらの小さな拠点群がネットワークを形成して生まれる新たな文化圏のことです。本研究の対象地域である沖縄県北部に位置し、世界自然遺産である豊富な自然と、縄文時代より続く優れた文化を有するやんばる地方3村(国頭村、東村、大宜味村)では、これまで様々な宿泊施設や体験施設が建設されてきました。中には一泊10万円以上の高級宿泊施設も存在します。しかし、これらの運営体制は集落と乖離しており、その収益が集落に還元されないケースも存在します。これに対し、本研究では、少子高齢化に伴う人口減少により、祭事や共同売店運営など、様々な事柄の担い手が不足し、集落運営が困難に陥っているやんばるの集落において、集落・村間の垣根をこえたネットワークを形成し、相互補助的に各集落に還元される形で収益を上げる方法を模索する点において意義があると考えています。本研究では、「New やんばる」構想実現に向けた第一歩として、やんばる地域における「むらやし」の調査・収集、やんばる地域の村人と連携したワークショップによるマスタープランの作成、モデルケースとしての与那地区における「むらやし」の空間化の実践を目的としています。

(2)-2 その特色とする獨創性

「New やんばる」は、村落間のネットワークを形成することで、1地域だけの活性化(衰退防止)にとどまらず、物理的に離れた各村落を繋ぐことにより、今まで生まれることのなかった情報共有や、資源の移動も行うことが可能になります。本研究は、このような相互活性化によって、中央に依存しない自律的な集落運営方法の実現を図るという実践型の研究であるという点に独自性があると考えます。また、本研究における「New やんばる」の対象地域として、やんばる地方3村を挙げていますが、これらの集落には、豊かな自然のやんばるの森を擁する山々を「御嶽」とする御嶽信仰が根付いています。そういった信仰や文化の共通点を基にし、物理的には距離が離れていながらも、ネットワークの形成を図るといふ、経済的観点からではなく、文化的側面を基にした新たな共同体の姿を考えるという点においても、独自性があると考えます。さらに、本研究では、「むらやし」を住民の生活観察とヒアリング、文献から収集します。特に生活観察では、土着の信仰と生活が切り離されていない営みの状況を再発掘・記録し、その調査を基盤に、地元民との共有を目的とした「むらやし」の空間化を行います。このような記憶媒体として、書籍などの二次元の媒体ではなく、「むらやし」を空間化した建築による三次元の継承方法をとることによって、身体的な経験として「むらやし」を理解することが可能であるという点にも独自性があると考えます。

(2) 実施計画の大綱

①研究計画

「New やんばる」の構想スケジュールは、以下の4段階を考えています。
Step1.意識の喚起-Newやんばるのビジョン制定、Step2.取り組み体制の確立、Step3.住民の生活サービスの維持確保や、文化体験の活性化、Step4.地元住民雇用の増加や収入の確保
本研究は、令和7年度においては、Step1における「むらやし」の収集、「むらやし」の共有を地元住民らと図る集落散策ワークショップやシンポジウムの開催、それらを通じた「Newやんばる」のビジョン制定と、Step2において、地域の文化や信仰、伝統に触れるという「むらやし」を共有することが可能な三次元の記憶媒体としての建築空間のモデルケースとして、国頭村と那地区における交流拠点施設「よんな〜館」の内装改修を計画しています。
令和7年度の具体的なスケジュールとしては、以下のように考えています。
4~7月:国頭村と那地区「よんな〜館」の設計、施工
8月:地元住民(特に子供たち)を交えた第1回集落散策ワークショップ実施(国頭村と那地区において「よんな〜館」を拠点として)

9~11月:やんばる3村に跨った村落調査、「むらやし」の収集

12月:地元住民(特に子供たち)を交えた第2回集落散策ワークショップ実施(与那地区以外の集落において)

1月:シンポジウム開催による、収集した「むらやし」を基にした「New やんばる」マスタープラン作成

2~3月:研究成果報告書作成/日本建築学会大会論文の準備

これまでの活動として、与那においては、「むらやし」の調査・収集を進め、村人や旅人に情報を共有する媒体として「よんなのこ」を発行することにより、「むらやし」の共有を図りました。また、収集した「むらやし」を建築空間に落とし込んだ、子供たちが与那の自然を感じながら遊ぶことができる遊具「ユアギマー」での空間化の実践を行いました。また令和6年度下半期~7年度上半期にかけては、集落運営の要と捉える共同売店の存続が困難であるという現状を踏まえ、相互扶助的ネットワーク形成の実践の一つとして、やんばる地域の集落間を連携して取り組みである「移動式共同売店」の計画・施工・運用実験を行います。この移動式共同売店は、やんばる地域の買い物難民の補助、共同売店に代わる住民の「ゆんたく」の場の提供といった目的だけに留まらず、文化、民俗、信仰に関する技術的なノウハウや次世代への継承方法などのレベルでの連携を各集落間で行うことが目的です。

②研究体制

建築設計と調査研究については、申請者の芦澤竜一、渡邊大志を代表者とし、滋賀県立大学の芦澤研究室と早稲田大学の渡邊研究室からなるメンバーが担当する。芦澤は日本の中山間地域や離島、農村の民族史、風土、気候、植生の調査とその結果を活かしたサステナブルデザインによる環境建築を設計してきた実績がある。また、共同研究者である渡邊は、都市の成り立ちや構造に関する社会学的な研究の実績がある。また、やんばる共同売店組合、くんちゃん草編みの会、与那区長といった地元住民にも、ヒアリング調査やワークショップ参加などの協力をしていたり、研究を行う体制をとります。

(3) 研究成果の公表予定

これまでの「むらやし」研究は、本年度開催された日本建築学会において、広く世間に公表しています。(上記参照)これに引き続き本研究の成果は、日本建築学会での口頭発表や、各建築メディア雑誌等により随時公表を行います。また、各共同研究者が主催するホームページへの掲載や研究プロジェクトチームによるホームページによって、広く研究成果を発表します。また調査研究の一環でまとめた各村落の特徴や魅力を記した広報誌を最終的に書籍化し、一般に分かりやすい形式・文体で成果を報告することを考えています。さらに「地域計画」(日本まちづくり協会)、「現代農業」(農文協農山漁村文化協会)他、建築分野に留まらない、開かれたメディアにて発表することを考えています。

豊川 斎赫

Saikaku Toyokawa

千葉大学大学院工学研究院 准教授

●研究課題

1964年に竣工した東京カテドラル聖マリア大聖堂（以下東京カテドラル、設計：丹下健三・坪井善勝）は、複数枚のHPシェルを組み合わせた大屋根を持つカトリック教会として知られる。しかしながら、近年の少子高齢化に伴うカトリック信者数の減少、コロナ禍以後の東京カテドラルでの結婚式数の減少が顕著となり、教会の経営基盤の脆弱化が予想される。このため、教会関係者から東京カテドラルそのものの維持存続について悲観的な意見が噴出している。

応募者は、海外の世界文化遺産の保全管理計画、国内の世界文化遺産登録を目指す建築の保全管理計画などを参照しつつ、①東京カテドラルの文化的価値の明文化と改修工事履歴のプロット、②今後の改修スケジュールと収支計画の立案を今後二年間で作成し、東京カテドラルの重要文化財指定のための基礎調査を行う予定で、本応募は①に取り組む予定である。

■主題

東京カテドラル聖マリア大聖堂の建築文化継承計画策定のための基礎調査

■研究計画の概要

(1) 研究の目的及び意義とくにその特色とする獨創性

1964年に竣工した東京カテドラル聖マリア大聖堂（以下東京カテドラル）は、複数枚のHPシェルを組み合わせた大屋根を持つカトリック教会として知られる。設計を丹下健三・坪井善勝が、施工を大成建設が担当し、国内外で高い評価を受け、現在では国の重要文化財候補の一つと見なされている。しかしながら、近年の少子高齢化に伴うカトリック信者数の減少、コロナ禍以後の東京カテドラルでの結婚式数の減少が顕著となり、教会の経営基盤の脆弱化が予想される。このため、教会関係者から東京カテドラルそのものの維持存続について悲観的な意見が噴出する事態となっている。

一方、文化庁は「建築文化振興法」の制定、および文化的価値を有する建築の維持・保全に対する支援方法（経営コンサルの紹介など）を検討している。応募者は文化庁担当者に掛け合った結果、文化庁では東京カテドラルを「建築文化継承計画」のパイロットモデルとみなし、同計画策定にあたって文化庁の協力を得る方向で調整が進んでいる。ただし、文化庁が掲げる「建築文化継承計画」はいまだ前例がなく、模索段階にとどまっている。

応募者は、海外の世界文化遺産の保全管理計画、国内の世界文化遺産登録を目指す建築の保全管理計画などを参照しつつ、①東京カテドラルの文化的価値の明文化と改修工事履歴のプロット、②今後の改修スケジュールと収支計画の立案を今後二年間で作成を目指している。なお、一般に国の重要文化財に指定された建物は大規模改修総工費の半額以上を国が補助する対象となるが、本研究の成果は「建築文化継承計画」の先行事例となるにとどまらず、東京カテドラルの重要文化財登録に向けた重要なステップとなると考えられる。

(2) 実施計画の大綱

応募者は2018-2019年にGetty Foundationの支援を受け、国立代々木競技場保全管理計画（Conservation Management Plan, CMP）の作成に関与したが、当該CMPは2021年に国立代々木競技場が国の重要文化財に指定される際に重要な役割を果たした。そこで本研究では、代々木競技場CMPを参照しつつ、①東京カテドラルの文化的価値の明文化と改修工事履歴のプロット（第1・2章）、②今後の継承方法（改修スケジュールと収支計画、第3章）を今後二年間で作成を目指す。特に2025年度は第1、2章に取り組む。代々木競技場CMPを参照して東京カテドラルの建築文化継承計画の章立てを組み立てた場合、以下のようなものが想定される。

第1章 東京カテドラルの概要 名称、竣工年月日、所在地、所有者、建物概要、敷地概要

第2章 東京カテドラルの建築文化的側面の評価

2-1. 調査概要 調査期間、資料群の分類と所蔵機関、収集資料

2-2. 建設に至る経緯 関口の歴史、敷地選定のプロセス、貢献者たち（丹下、坪井、石井）

2-3. 設計の経過 コンペ案、基本設計、実施設計

2-4. 建設の経過 施工プロセス、施工段階の創意工夫

2-5. 竣工後の経過 改修工事の履歴、耐震改修工事の概要

2-6. 東京カテドラルの重要性 東京カテドラルの歴史的・文化的価値、現在に至る価値の担保

第3章 東京カテドラルの継承方法の検討

3-1. 現状の課題整理 耐震・漏水・空調等に関する技術課題、活用・資金調達の経営的課題

3-2. 継承計画 課題解決案立案

3-3. 推定修繕・整備工事項目の設定

3-4. 長期修繕計画 長期修繕計画表、収支計画グラフ、推定修繕・整備工事費内訳書

3-5. 収支計画の検討 修繕積立金の額の設定、新規収入目標金額の設定

(3) 研究成果の公表予定

研究成果を日本建築学会計画系論文集、もしくは日本建築学会技術報告集に投稿する予定である。

日本の建築公開の現状と未来に関する調査研究

倉方 俊輔

Shunsuke Kurakata

大阪市立大学大学院工学研究科 教授

●研究課題

普段は入れない建築や空間を、特定の日に一斉に入れるようにする「建築公開」は、2014年に開始された「イケフェス大阪」を契機として、日本各地で開催されるようになっていく。2024年に始まり、申請者が実行委員長を務める「東京建築祭」は2日間の会期にのべ6万5000人が参加した。本研究は、この社会的に注目を集めている潮流を一過性のものに終わらせず、空間造形デザイン文化の振興に寄与する方向を提示するために、日本の建築公開の現況を調査し、諸外国の現状と共に分析して、未来への指針を示すことを目的とする。2025年の東京建築祭ではアンケート調査や行動調査などを実施し、いくつかの実験的なプログラムを行う。国内各地の多様な建築祭に関しては、現地でのリサーチやヒアリング結果を分析して、建築公開の普遍性と地域性を明らかにする。この流れを単発のイベントを超えて、日本で定着させていくために、建築公開の基盤となっている国外のArchitecture Centerを現地調査し、未来への仕組みづくりを考える。

■研究計画の概要

(1) 研究の目的及び意義とくにその特色とする獨創性

近年、我が国の空間造形デザイン文化の振興に寄与する動きとして注目されるのが、各地で行われるようになってきた建築公開イベントである。これは普段は入れない建築や空間を、特定の日に一斉に入れるようにするものであり、広く周知されることによって、一般の人々と空間造形デザインとの距離を近づける効果を持つ。従来からの文化財公開などと異なり、さまざまなイベントやデザイン、アートとの連動などを行うことを通じて、建築をはじめとした造形文化との日常的な接点を生み出す点に特徴がある。国外でこのような動きに近いのが「Open House」と呼ばれる催しである。皮切りになったのが1992年に開始された「Open House London」で、20件を公開する小さな試みとして始まり、今では約800件の公開にのべ25万人が参加する大きなイベントに成長している。これに刺激されて、同様に年1回、都市の建築を一斉に公開するイベントがさまざまな都市で実施されるようになり、2010年には国際的なネットワークである「Open House Worldwide」が組織されて、現在の加盟都市は60を越える。これに呼応した国内の潮流として大きいのが、2014年に始まった「イケフェス大阪」（生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪）で、年々規模を大きくして2019年にはOpen House Worldwideに加盟を果たし、今では毎年のべ6万人が参加する秋の恒例イベントとなっている。これを契機として、2022年からは「京都モダン建築祭」、2023年からは「神戸モダン建築祭」が行われ、いずれも数万人が参加して、これまでの建築界にはなかった専門家と市民との接点を形成している。ところで、これらはイケフェス大阪とは異なり、有料のパスポート制を採用して、民間で運営資金をまかなうものである。近年は本家本元のOpen House Londonも「Open House Festival London」に名称を変更し、旧来の建築公開に留まらない多様なプログラムを提供し始めている。2024年には「東京建築祭」が申請者が実行委員長となって実施された。これは運営資金を民間ベースで調達しながら、無料の建築公開を実現させたもので、初回にしてのべ6万5000人という過去最大の動員を果たして、多くのメディアに取り上げられた。2025年にはアートと連携したイベントとして「ひろしま国際建築祭」の開催が発表されている。イケフェス大阪の開始から10年、国内各地でさまざまな建築公開イベントが実施されるようになった今、その現況を調査し、諸外国の現状と共に分析して、未来への指針を示すことが必要であり、それが本調査研究の目的となる。社会的に注目を集めている潮流を一過性のものに終わらせず、空間造形デザイン文化の振興に寄与する方向を提示することに、本調査研究の意義がある。申請者は東京建築祭の実行委員長を担い、イケフェス大阪と京都モダン建築祭の実行委員長を務める実践者でもあり、調査研究の成果が我が国の造形文化の発展に直接に貢献することが、特色とする獨創性である。

(2) 実施計画の大綱

1. 東京建築祭2025における調査研究

2025年の東京建築祭は、5月24日（土）、25日（日）を中心に開催を計画している。この機会を活用して参加者へのアンケート調査や、会期中の行動調査などを実施し、いくつかの実験的なプログラムを行う。初年度の東京建築祭は、日本橋、銀座、大手町といったエリアを開催地とし、18件の申込不要・無料の特別公開、計78回の申込抽選・有料のガイドツアーを行って、のべ6万5000人が参加した。2年目となる今回は、同様の形式で、範囲を上野、品川、港区エリアまで拡大し、約30件の特別公開と計200回のガイドツアーを予定している。どのような人々が、何を求めて建築公開に参加し、いかなる変化があったのかについて、申請者が所属する大阪公立大学の学生・大学院生と共に調査する。また、建築を使った対話型鑑賞や子どもプログラムなど、従来になかった実践を行い、行動観察などを通じて、効果を測定、分析する。

2. 国内各地における建築公開の調査研究

先に挙げたもの以外にも国内各地で、2009年から福岡では松岡恭子らによって「MAT fukuoka」（現・NPO法人福岡建築ファンデーション）が実施され、2013年からは高田真らが「ひろしままでもものがたりフェスタ」を実行し、2011年から小池志保子らによって「オープンナガヤ大阪」が開催されている。また、2024年には愛知県半田市で「はんだ建築まつり」が始まり、申請者の耳に届いているだけでも、豊岡市、津山市、北九州市などで開催に向けた動きがみられる。2022年に開始された「マツモト建築芸術祭」や、2025年10～11月に予定されている「ひろしま国際建築祭」といったアート主導の動きも含めて現在の潮流を幅広く捉え、現地でのリサーチやヒアリングを通じて、なぜそれが生まれ、各所でどのような仕組みが成り立たせているのか分析することで、建築公開の普遍性と地域性を明らかにする。

3. 国外における建築公開の基盤に関する調査研究

建築公開の流れを単発のイベントを超えて、日本で定着させていくために、その基盤となっている国外のArchitecture Centerを調査研究する。対象としてChicago Architecture Center（アメリカ）、Canadian Centre for Architecture（カナダ）、Architecture Centre of Amsterdam（オランダ）、Danish Architecture Center（デンマーク）などを予定している。現地調査やヒアリングを通じて、我が国においても日常的に、地域歴史遺産を研究し、平明で奥深い展示やガイドツアーなどを行ない、居住環境の向上に貢献することで、未来社会の創生に資する仕組みを創出する手立てとする。

(3) 研究成果の公表予定

東京建築祭2025における調査研究については、公開に問題がない部分に関して、東京建築祭公式サイトで公表を計画している。大阪公立大学の学生・大学院生と共に調査分析した内容は、学術論文として公開を予定している。国内各地における建築公開の調査研究については、東京建築祭に関連したオンラインイベントで公表し、今後各地での建築祭の開催に広く資するものとする。国外における建築公開の基盤に関する調査研究についても、各地の建築祭と研究結果を共有し、恒常的な仕組みづくりに活用する予定である。

高齢化社会における療法としての福祉ランドスケープ構築の基礎的研究 - 園芸療法における園芸行為と造園の双方による環境空間構築 -

後藤 克史

Katsushi Goto

明治大学 研究・知財戦略機構 客員研究員

●共同研究者

橋内 智也

橋内庭園設計

●研究課題

本研究では高齢化に伴う特に高齢者医療費など社会的背景を踏まえ、療法としての園芸療法士の整備と「園芸福祉(学)」の提唱に注目し、造園学および建築学的視点から空間や環境の評価、類型化を目的とする。特に園芸(学)、造園(学)の異なる学問、実務分野の双方に園芸療法を切り口に、公共福祉と環境および空間に関する萌芽的な研究になることを目的とする。療法という言葉が示すように、園芸療法は病気もしくは障がい等があり何らかの治療や療法が人を対象としている。しかし園芸や自然、緑を体験することで「健康的になる」「気持ちいい、楽しい」といった幸福感、満足感も誰もが共有できる体験であることは間違いない。さらなる園芸療法の普及と理解、実践を展開するため、療法としては園芸療法士の整備にともない園芸療法の定義を明確にするとともに、園芸を实践するすべての人の生活の質向上を対象とした「園芸福祉(学)」も提唱されている。本研究では園芸(学)と造園(学)、さらには建築(学)も含めた環境、ビルトエンバイロメントと園芸療法、園芸福祉を含めた行為の関係性が作り出すことができる生活空間への理解を深めることを目的とする。

■研究計画の概要

(1) 研究の目的及び意義とくにその特色とする独創性

米国でHorticultural Therapyが初めて言及されたのがAlice Burlingame とDonald Watsonの著書「Therapy through Horticulture (1960年)」であり、松尾英輔氏らによって日本に「園芸療法」として導入され、普及、実践活動へ展開したのは1990年代で、自治体、施設、病院の試行への関心も飛躍的に増えた。その背景には当然、日本の人口の高齢化、とくに高齢者医療費の高額負担への対策というのがある。2000年代には園芸療法士資格認定制度が整備され、その養成が行われるようになった。2008年には日本園芸療法学会が設立され、現在は同会がその認定をしている。療法という言葉が示すように、園芸療法は病気もしくは障がい等があり何らかの治療や療法が人を対象としている。しかし園芸や自然、緑を体験することで「健康的になる」「気持ちいい、楽しい」といった幸福感、満足感も誰もが共有できる体験であることは間違いない。さらなる園芸療法の普及と理解、実践を展開するため、療法としては園芸療法士の整備にともない園芸療法の定義を明確にするとともに、園芸を实践するすべての人の生活の質向上を対象とした「園芸福祉(学)」という言葉が松尾氏らによって提唱された。園芸(学)が植物を栽培することを目的とした行為、学問であるのに対して、造園(学)もしくはLandscapeはおなじ植物を扱うが、空間や環境の形成を目的としており、その性質がことなる。目的に適した環境づくり、とくに平面計画などは建築学分野では利用目的、ビルディングタイプ毎に発達している。一方、造園学では都市計画学、農村計画学などの分野がからも総合科学としての研究が行われている。しかし、特定の目的、特に園芸療法、園芸福祉をはじめとした公共福祉に還元できる造園(学)の計画学、造形理論は造形学会発行のJILAにおいてもそれほど多くなく、その必要性を感じる。特に、園芸医療が対象とする療法が必要な人にとっては健康者が体験する空間体験とは異なる体験をする可能性が大きく、園芸療法の対象や目的に合わせた(Karela Agricultural Univ. のG.S. Sreedaya)によるGeriatric, Vocational, Socialに目的、対象が大区分されている)造園(学)の実践、研究が必要である。逆に造園を目的とした緑地空間が園芸療法に利用可能かという単純にはいかないことは単純にはいかない。水野妙子氏は日本緑化工学会のジャーナルにて園芸と造園の学問、実務的な違いを指摘しているが、具体的な環境構築、造形、デザインという観点では本研究は日本において萌芽的研究になりえる。よって、本研究では既存する園芸医療もしくは生活の向上を目的とした園芸活動、つまり造園された環境の空間体験だけでなく、積極的な園芸行為が行われる空間、環境を対象に空間事例を収集するとともに、その評価を造園学または建築学的な空間、環境評価を行うことを目的とする。

(2) 実施計画の大綱

本研究は基礎研究を目的としており、園芸療法が行われている医療施設、高齢者施設の実空間の実態調査(写真撮影、実測調査、3Dスキャン)が第一段階となる。調査で得られたデータをもとに、空間の平面計画、ダイアグラム化とともに空間のマテリアル特性を抽出する。特に、療法が行われる対象者の身体的能力に差があると考えられるので、園芸療法の異なる療法方法にしたがって、空間を比較対象とすることで相対的な空間分析を行う。療法に限らず、福祉的な側面に園芸を園芸福祉的な利用も含めて空間的に類型(タイプ別)に分けることで、療養対象者の利用状況、感情等の定性的な調査と空間との関連付けを明確にする。調査対象の施設、コミュニティへのアンケートやヒアリングでは療養が行われている時以外の空間利用、園芸という行為が造園に繋がり環境への変化、向上に対する調査、分析を行う。また、研究者代表者は2022年度に同助成金にて高齢者施設や子ども食堂を中心とした空間調査をおこなっており、福祉施設や高齢者施設での食空間の基礎研究をおこなった。行為こそ食事と園芸とで異なるものの、園芸を通じた日常におけるWell-being、社会的意義の国際的な比較調査も視野に在る。特に研究の前半では日本における療養を目的とした施設への調査が対象となるが、園芸療法の発祥地である米国もしくは欧州での療養に関する最新事例への調査をするとともに、英国はマギーセンター(がん患者のための施設で病院に必ず併設される必要がある)のように医療行為を目的としないが患者とその家族のための施設を訪問し、園芸療法の療法と園芸の行為が与える広義の福祉的(園芸福祉)、社会的意義への重要性を明らかにする。

具体的には以下の5つのステップに分けることができる。

(1) 第1段階として文献や自治体の資料より、訪問調査対象となる高齢者施設をはじめとした施設、医療施設を抽出する。また、日本園芸療法学会にもヒアリング等を行い、療法士が実践している療法への理解を深める。これは、特に対象者の身体的能力に合わせた療法の特徴を空間類型と関連付ける為に行う。

(2) (1)で抽出した施設に訪問調査(第1回)を行う。具体的には従来の実測や写真での調査に加えて、3次元スキャナを利用した実測と空間のデジタルデータとしての取得を試みる。

(3) 上記で得られたデータをもとに、平面図、空間のダイアグラム、マテリアルや特徴的な物品の抽出を行う。さらに、空間やマテリアルを類型(タイプ)別に分類する。

(4) Wellbeingにつながる空間の抽出を訪問調査(第2回)にて行う。具体的には1回目の訪問調査では空間を調査の対象としたが、2回目ではインタビューや園芸、また園芸行為によって生まれる空間、環境に関する対話を通じて、現在抱える園芸行為が与える環境構築(造園行為といえる)に関する課題点を抽出する。

(5) 米国、英国を中心に園芸療法の先進的事例、例えば東ロンドンのHNS(National Health Service)が運営するNHS_Forrest等を訪問。また、医療行為を目的としない、つまり療法を目的としない園芸、造園の施設としてマギーセンター等の施設を訪問、国際的な視野での比較調査を行う。

(3) 研究成果の公表予定

本研究には園芸療法を通じて、環境とその利用目的の関係性を特に園芸(学)と造園(学)の異なる学問分野にわたる萌芽的な研究になることを意図している。そのため、より技術的、実務的な内容にフォーカスした内容では(共同研究者の橋内氏を筆頭として)造園学会が発行する「ランドスケープ研究」への論文投稿を目的とする。また、療法と空間の双方の関連性にフォーカスし、園芸行為(Horticulture)から造園(Landscape)の融合を唱える内容で日本園芸良好学会雑誌への投稿を予定している(研究代表者、後藤を筆頭として投稿)。また、日本の園芸療法に関する空間、海外事例での空間の違いを、特に園芸療法(Horticultural Therapy)を目的としながら違う環境下で療法が行われる比較論としてAmerican Horticultural Therapy Association発行の「The Journal of Therapeutic Horticulture」への投稿を考えている。また、本研究は療法という観点からはその学問領域に限られるが、園芸福祉、また造園学という観点からは学際的内容を含むことになる。よって、オランダを拠点としているUrbanismの雑誌「Monu」の2026年度発行(年2回)において特集テーマが致すれば同誌への投稿を視野に在る。もしくは、研究代表者がアカデミシャンとして会員となっている、英国はAcademy of Urbanismの会誌「Here & Now」への寄稿も視野に在る。

倉島 美和子

Miwako Kurashima

KOSMOS実行委員会 代表

●活動の趣旨

本事業は、日本の伝統文化の素晴らしさに現代的な解釈を取り入れて、国際的あるいは幅広い年齢層に発信することを目的とし、1件の国際展と1件の日本・アメリカ・ヨーロッパをつなぐ学生や若い人々が参加できる講演会及びワークショップを実施します。

●実施時期

実施期間：2025年5月ー 9月予定(現地打ち合わせ・輸送期間・展示期間を含む)

実施場所:ユネスコ・UNESCO(国連教育科学文化機関)本部 7, place de Fontenoy 75352 Paris 07 SP France

実施回数:ワークショップ:4回程度 講演会(オンラインも含む)1回 展示会 1回

■主題

日本の伝統と技の継承と発展、
多様な芸術的表現による国際交流事業

■計画の概要

ユネスコ・パリ本部にあるイサム・ノグチ設計の日本庭園で、経年劣化した庭園の再生や第2次世界大戦後80年を平和のモニュメントの物語を未来への新しい芸術の継承として語り合う呈茶席の場を日仏をメインとするクリエイター・アーティストと共に作り上げ、学生も広く参加できる形で開催する。

KOSMOS実行委員会が令和4年度申請で完遂したプログラムの成果を最大限に活用した上で、アーティストや学生と協働するインスタレーション及びトークセッションを開催し、広島やニューヨークを含めた学生や各財団の関係者の参加や、前回のワークショップでの成果が紹介された甲南女子大、大阪工業大学、京都大学の研究室等と連携し、平和の象徴である「庭」「公園」「モニュメント」の創造の概念を日本の伝統文化の継承と未来への新しい創造として世界に発信する。

■その他特記すべき事項

本事業の基盤となる事業のURL

ニューヨークでの展示

<https://www.noguchi.org/museum/exhibitions/view/miwako-kurashima-folding-cosmos/>

関連レクチャー

<https://www.noguchi.org/museum/calendar/event/2024-10-17-1900-exploring-the-world-of-the-one-mat-room/>

関連サイト

<https://miesbcn.com/calendar/folding-cosmos-miwako-kurashima/>

神戸での展示での展示

https://www.dougukan.jp/special_exhibition/isamunoguchitools

フランスでの展示 <https://maisonlouiscarre.fr/mlc/en/folding-cosmos/>

スイスでの出版 <http://call-me-edouard.com/en/books/folding-cosmos-22/>

スペインでの展示 <https://miesbcn.com/calendar/folding-cosmos/>

木村 博昭

Hiroaki Kimura

Young Architects Conference 代表

●活動の趣旨

若手建築家の国境を越えた交流の場を創出することで、彼らが担うこれからの建築の可能性を拡げていくことを活動の目的としています。個人の活動や作品という共通言語を通した展覧会を作り上げ、異なる環境や文化を持つ建築家の交流により、相互に刺激を与え合い、未来に繋がる国際性を育みます。YAC2025では、日本とドイツの若手建築家とその作品を選出し、それぞれの地に展覧会場を巡回させ、より直接的なコミュニケーションが生まれる活動を目指します。

●実施時期

京都展(実施期間:2025年11月一週間程度、実施場所:京都文化博物館別館予定、実施回数:1回)

ケルン展(実施期間:2026年3月三週間程度、実施場所:Japan Foundation ケルン日本文化会館予定、実施回数:1回)

■主題

Young Architects Conference 2025 ～日本・ドイツの若手建築家による展覧会～

■計画の概要

【テーマ】

『人と建築』

今回の展覧会では、兼ねてより大学間交流で培ってきた京都とケルンの若手建築家を中心に連携し、国境を越えた交流の場を創出します。コンペティション方式により日本の若手建築家30組、ドイツの若手建築家30組を選出し、建築家自身にも焦点を当てながら、個人の活動や作品という共通言語を通した展覧会を作り上げます。異なる環境や文化を持つ若手建築家の交流により、相互に刺激を与え合い、これからの未来をつくる新しい繋がりを育みます。また、京都とケルンそれぞれの地に展覧会場を巡回させることにより、より直接的なコミュニケーションが生まれる活動とします。

異文化に生きる建築家と彼らが生み出す建築の在り方を知ることは、自分自身あるいは自国の建築の在り方を見つめることに繋がり、そこに「国際交流」の意義があると考えています。また、建築家を志す「若手」建築家に焦点を絞り、同世代の価値観共有、表現の場、情報交換、国際性を含めたボーダーレスなプラットフォームとして、個々の知恵を集結することにより、一人ではできない経験や学びを叶えることを目指しています。

【参加予定国】

日本、ドイツ

【参加者見込数】

展覧会出展者:日本から30組、ドイツから約30組の合計60組

展覧会来場者:約500名(2カ国2カ所合計)

展覧会場は、京都展、ケルン展共に市街地のアクセスの良い場所で実施することにより、建築分野以外の方にもこの活動を認知してもらいやすいよう配慮しています。

■その他特記すべき事項

この展覧会は、6年前の2019年に「Young Architects Conference 2019」として第1回展覧会を開催しています。50名を超える日本を中心とした出展者の作品をもとに、京都、バンコク、チェンマイの3都市にて巡回展を行い、ご盛況を頂きました。

新型コロナウイルスの感染拡大や世界情勢の変化により国際交流の機会は減少していましたが、世界との繋がりと次世代の文化構築のため、2年前の2023年に再びその契機となる交流の場「Young Architects Conference 2023」として第2回展覧会を企画し、日本から30組、タイから30組の若手建築家の作品のもと、日本とタイの最初の交流展として京都、バンコク、チェンマイの3都市にて巡回展を開催しました。

第3回展覧会となる「Young Architects Conference 2025」は、交流の輪をヨーロッパに拡げ、ドイツの若手建築家との協働し巡回展を予定しています。さらに、今後も2～4年に一度の継続的な開催を予定し、交流先を世界に拡大していくことで、回を重ねるごとにその深化を高め、若手建築家のよりグローバルな交流の輪を生み出すことを目指しています。

西 毅徳

Takatoku Nishi

●受け入れ先と受け入れ期間

1 : OLD MINE RESIDENCY / City of
Outokumpu, FINLAND

2 : ARE (Artist Residencies Enschede) /
City of Enschede, NETHERLANDS

3 : Lademoen Kunstnerverksteder (LKV) /
City of Trondheim, NORWAY

1 : 03月31～06月01日 (フィンランド)

2 : 06月02日～08月28日 (オランダ)

3 : 10月03日～11月30日 (ノルウェー)

●研修の内容と方法

2025/04月～06月 (1/4半期)

研修テーマ : 「北欧の光環境と空間デザイン: フ
ィンランドの自然光が生む空間」

フィンランド特有の自然光を活用した光の教会
建築を主に研究したい。また、同時に自然環境
の調査を行なう。方法として、照度計や湿度計
などの計測器を用いたデータ収集、毎日の天候
の記録、そして映像や写真としての記録。それら
の調査をもとに、レジデンス機関のプロデュー
サーなどとの対話を通してプロトタイプとしての
インスタレーションの制作。

2025/06月～08月 (2/4半期)

研修テーマ : 「風土と水が織りなすオランダの
光: 動的要素を取り入れた構造」

オランダ特有の平坦な地形と風、水路の存在に
よって導かれる光は多くの画家が憧れており、私
はこの光を探求したい。環境データの収集、天
候の記録、土地の成り立ち、そしてプロジェク
トマネージャーをはじめ、地域住民などとの交流
を通じて空間と人の関係を模索する。同じよう
にこの期間での調査をもとにプロトタイプとし
ての作品を制作。

2025/10月～11月 (3/4半期)

研修テーマ : 「極北の季節と建築空間: ノルウ
ェーの自然環境と人の建築」

秋から冬へ移り変わる極北の気候条件と日照
時間の変化をもとにスターヴ教会の研究をした
い。教会内部の光環境と自然素材の使用法を
記録し、地域特性が空間に与える影響を考察。
また滞在先のトロンハイムの海岸線や自然環境
を活かしたデザインも探りたい。ここでも研究
とレジデンスのマネージャーや関係者などとの
対話から、プロトタイプとしての作品を制作。

2025/12月～2026/03月 (4/4半期)

帰国後のテーマ : 「ヨーロッパと日本の比較研
究: 光と環境、そして空間と人」

これまで3カ国で行なった研究とアウトプット
としての作品を統括することで、ヨーロッパにお
ける光と空間、そして人の関係についてまとめたい。
そこから日本の光や空間、日本人としての関係を
比較して見えてくる相違点を導き出す。これら
の制作物や観察データをもとに報告書作成、展
覧会や論文などでの発表につなげたい。

■主題

「ヨーロッパにおける自然現象の特性を活かした空間体験の探求」をテーマに、フィンランド、オランダ、ノルウェーの環境と文化を舞台に、自然現象(光、風、気象)を建築的に解釈する。空間が人々に与える心理的・身体的影響を考慮し、美しいと感じる空間の可能性を探るため、実験と検証を行う。また、各地域での研究活動を通じて、地域に根ざした空間体験のプロトタイプを制作し、人・空間・自然現象が相互に影響し合う持続可能な設計手法を探る。

■活動歴

2024年 成果展, "微粒子の呼吸", TOKASレジデンス2024, トーキョーアーツアンドスペース本郷, 東京

2024年 成果展, "Ateljé Stundars", Open Air Museum and Centre of Culture and Art, ソルフ (フィンランド)

2023年 成果展, "HIAP Open Studios / Autumn 2023", HIAP Studio building, スオメンリンナ (フィンランド)

2023年 企画展, "INTERNATIONAL DESIGN / EXHIBITION", MOOD MUSEUM OF DESIGN, コモ (イタリア)

2023年 ゲスト講師, 武蔵野美術大学 建築科 講義「基礎造形」, 武蔵野美術大学, 東京

2023年 単独公演, JID AWARD フォーラム 2022 & 2023, 主催:公益社団法人日本インテリアデザイナー協会, 東京ミッドタウンリエゾンセンター, 東京

2023年 パネリスト, [セミナー] デザイン学生交流企画「インテリアデザインの現在」, 主催:名古屋市・(株)国際デザインセンター, 共催:公益社団法人日本インテリアデザイナー協会・中部デザイン団体協議会, ナゴヤイノベーションズガレージ3F, 愛知

2022年 グループ展, "THE WAY", Valletta IAM Contemporary Art, ヴァレッタ (マルタ)

2021年 アートイベント, "なおえつ うみまちアート", 船見公園沿海岸, 新潟

2019年 学会展示発表, "環境芸術学会: 20回記念大会 環境と芸術1964 TOKYO 2020", 三緑山 広度院 増上寺, 東京

2019年 グループ展, "Land Politics", Valletta Contemporary Art Gallery, ヴァレッタ (マルタ)

2018年 グループ展, "Transnational Tokyo", 138 St. Christopher street, ヴァレッタ (マルタ)

2018年 アートイベント, "欧州文化首都 VALLETTA 2018", 地中海, ヴァレッタ (マルタ)

2017年 アートイベント, "数奇フェス 2017", 上野公園, 東京

2016年 アートイベント, "Winter Vista Illumination 2016", 立川昭和記念公園, 東京

2016年 アートイベント, "数奇フェス 2016", 上野公園, 東京

屋敷 美玖

Miku Yashiki

●受け入れ先と受け入れ期間

Politecnico di Milano

School of Architecture Urban Planning
Construction Engineering

Architectural Design and History

2025年4月-2026年3月

●研修の内容と方法

2025/04月～06月 (1/4半期)

リサーチ

・FAIの歴史

・FAI [Le Giornate FAI di Primavera]

・FAIロンバルディア支部へのインタビュー・活動参加

2025/07月～09月 (2/4半期)

フィールドワーク

FAIが修復・保存再生に関わる建築を訪れ、活用法、遺産を保護しつつ地域経済や観光業の発展にどのように貢献しているかを調査する。

現代都市に於ける歴史的建造物の役割と調和

①潜在する型の発見 ②再生の手法 (スボリア) ③現代との応答

2025/10月～12月 (3/4半期)

デザインスタジオ|設計提案

デザインスタジオでイタリアの歴史的な建築物、町並み、都市、景観を対象に、歴史的、文化的価値を読み解く。建物や都市空間の実測、図面、絵図や古文書といった史料分析を通じて、新旧の空間と社会をなりたいたせるしくみを理解し、どのように現代の文脈に介入していくのか、デザインの対話と調和、保存再生の方法を設計を通して考えていく。

2026/01月～03月 (4/4半期)

分析・まとめ

研修前段ではイタリアの歴史的建造物がどのように活用、再生、保存され、現代の文脈にどのように介入してきたのか、また文化的需要に基づいて歴史をどのように耕してきたかを探求する。それらを踏まえ、日伊を比較し、日本における建築の持続可能性と現代都市への介入方法を考察する。

■主題

歴史的建造物の現代的文脈への介入方法

ーイタリア環境基金FAI (Fondo Ambiente Italiano) の活動を通じてー

■活動歴

発表

2024年8月 “カステルヴェッキオ美術館における視線の運動 -3D スキャンによる空間データの意匠論的活用 -”

-2024年度日本建築学会大会 (関東) 明治大学駿河台キャンパス

2024年8月 “カマルドリ修道院における隠修士共同体”

-早稲田大学イタリア言語・文化研究会(第184回)

2024年2月 “Polyphony -中世修道院共同体”

-早稲田大学優秀修士論文・計画発表 早稲田大学大隈講堂

2023年9月 “聖なる谷 -隠れキリシタン、光と影の継承-”

-2023 年度日本建築学会大会(近畿) デザイン発表会 文化を発信する建築 京都大学吉田キャンパス

研究活動

2023年9月 “ICT 技術を用いたカルロ・スカルパの建築作品における「絵画的手法」に関する研究 ”

日本学術振興会 科学研究 Museo di Castelvecchio, Verona, Italy

教授：平瀬有人 (早稲田大学芸術学校教授、早稲田大学理工学術院総合研究所 兼任研究員)

教授：副田和哉 (第一工科大学工学部 建築デザイン学科講師)

リサーチアシスタント：屋敷美玖 (早稲田大学創造理工学研究科建築学専攻修士 2 年)

2023年8月 “ 中世修道院共同体における身体と空間の関係 ”

Toscana, Italy / Provence, Lyon, France / St.Gallen, Switzerland

2020年4月 “Vernacular” 山田紗子建築設計事務所 Under 35 Architects

-2020年10月 exhibition 2020

デザイン賞

審査員

米田 明氏

Akira Yoneda

●プロフィール

1959年 兵庫県生まれ
 1982年 東京大学工学部建築学科卒業
 1984年 東京大学大学院工学系研究科修士課程修了
 1984～89年 竹中工務店設計部
 1991年 ハーバード大学デザイン大学院 (Harvard University Graduate School of Design) 修士課程 (MArch II) 修了
 1991年 建築設計事務所アーキテクトン設立
 2004～13年 京都工芸繊維大学准教授
 2014～20年 京都工芸繊維大学教授
 2021年～ 関西学院大学建築学部教授、京都工芸繊維大学名誉教授

●主な受賞歴など

1995年 JCDデザイン賞 / 日本商環境設計家協会(アルス堺東アップル店)
 1997年 JCDデザイン賞 / 日本商環境設計家協会(極東開発三木工場事務所棟)
 2004年 第20回吉岡賞(現新建築賞) / 新建築社 (BLOC)
 2004年 AR Design Vanguard 2004 / Architectural Record
 2005年 グッドデザイン賞 (HP)
 2005年 第8回TEPCO快適住宅コンテスト / 東京電力: 入選(HP)
 2006年 日本建築学会 作品選集 2006(HP)
 2006年 グッドデザイン賞 (Δ)
 2006年 日本建築家協会 優秀建築選 2006 (Δ) グッドデザイン賞 (K Clinic)
 2008年 World Architecture Festival / Barcelona: "Health" section shortlist 入選 (K Clinic)
 2008年 DFA (Design for Asia Awards) 2008 / Hong Kong Design Centre : Bronze Award (K Clinic)
 2008年 日本建築家協会 優秀建築選 2008 (K Clinic)
 2009年 International Architecture Awards / The Chicago Athenaeum (Δ)
 2010年 WAN(World Architecture News) AWARDS 09 : House of the Year (HOJO)
 2010年 D&AD AWARDS 2010, Environmental Design "Leisure & Tourism", In-Book : Bronze Award (HOJO)
 2010年 IDA (International Design Awards) 09, New Residential Building : First Prize (HOJO)
 2010年 IDA (International Design Awards) 09, New Commercial Building : First Prize (K Clinic)
 2011年 京都府新総合資料館(仮称)公募型設計競技:入選
 2018年 IDA (International design awards) 17, New Residential Building : Bronze Award (Landing House II)
 2018年 ABB Leaf Awards 2018, Residential Building - Single Occupancy : shortlist 入選 (Landing House II)
 2018年 AMP (Architecture Master Prize)18, Residential Architecture : honorable mention (Landing House II)

2025 (令和7) 年度顕彰事業

第32回 ユニオン造形デザイン賞

■テーマ

つながる建築

現代社会の加速度的変化の中で、人々は物理的にも精神的にも分断化されやすい状況にあり、孤立しがちです。「つながる建築」とは、この課題に取り組み人と人、人と自然、人と文化が結びつく有機的な場を構築する、建築的な提案を求めるものです。

そのような場は単一の機能を持つ建築ではなく、異なる領域を合わせ持ち、人々の活動が交差することによって、予期せぬ交流が生まれるような従来の境界(ボーダー)を越えていく、流動性と融合性をあわせ持った建築の創発的なあり方において可能になるのでは、と思われまます。

また時間的な流れの観点からすると私たちは、過去とのつながりと共に未来へ受け継いでいくべきものを見失いつつあるのではないかと考えられます。こうした時間的なつながりの喪失に対して、建築はいかなる可能性を示しうるのか。固有な場を持つ歴史、文化、記憶を継承し、それらを積極的に未来へとつなげて人々の新たな営みのリソースとする建築的アイデアを求めます。

こうした建築を構想するにあたって、特に建築の技術的側面に留意してください。建築固有の技術は、そもそもは人の手、技によってもたらされてきました。近代になって科学技術が驚異的に発達すると、効率化と標準化を目指す工学的な建設はむしろ伝統的技術とのつながりを失いつつあるように思います。そこで長い年月によって培われてきた伝統的英知と最先端技術がどういう関係をもてば、未来に向けた新しい建築の物語が紡がれるのか。皆さんからのまだ見ぬビジョンに期待します。

■作品応募件数/87件

| 年齢別 | |
|-------|----|
| 年齢 | 人数 |
| 16～19 | 6 |
| 20～21 | 25 |
| 22～23 | 32 |
| 24～25 | 20 |
| 26～27 | 2 |
| 28～29 | 2 |
| 合計 | 87 |

| 地域別 | |
|----------|----|
| 地域 | 人数 |
| 北海道 | 1 |
| 東北 | 0 |
| 関東(東京以外) | 10 |
| 東京 | 24 |
| 北陸・信越 | 5 |
| 東海 | 7 |
| 近畿(大阪以外) | 15 |
| 大阪 | 9 |
| 中国 | 8 |
| 四国 | 0 |
| 九州・沖縄 | 8 |
| その他 | 0 |
| 合計 | 87 |

| 職種別 | |
|------------|----|
| 職種 | 人数 |
| 専門学校 | 3 |
| 短大・高専 | 3 |
| 大学 | 36 |
| 大学院 | 37 |
| 設計・デザイン事務所 | 3 |
| フリー及び一般 | 5 |
| 合計 | 87 |

UNION DESIGN AWARD COMPETITION

審査講評

全体の講評

今回のテーマは、「つながる」という一般的で判りやすい言葉によって建築を形容したものとなっている。それゆえに多岐にわたる事物についての、多様な提案がなされるだろうと予想はしていた。そもそもなぜこのようなテーマにしたのかというと、ひとえに「つながる」とは人間の認識の基本的な様態であり、また人間が生きていく上で欠かせない態度だからである。古来より記憶や発想、さらにはコミュニケーション上のレトリックの技法として、結合術というものが考えられてきた。

人間が新しいつながりを見出すことによって、現実世界の既存の関係を再編成し、人間の生き方の新しい関係性が生み出されていく。建築は、そのような人間の持つ関係性を具体的な場所として媒介し、構築するものだということができる。こうして人間から離れた存在であった自然や他者が、身近な人間が生きる場としての環境や社会となってきた。特に近代以降、人間が神や王の支配から逃れて自律的な主体となると、建築は単に権威を象徴する物質的な実体ではなく、人間関係のネットワークを再領域化するメカニズムへと移行してきた。

このような観点から、今回提出された案の様々な構想を追体験していくことは、楽しかった。最終的に選ばれているものは、「つながる」ことによって浮かび上がる新しい関係性が、硬直したものでなく、非現実的なものでもなく、柔軟でかつ自然であり、さらに矛盾する様だがユニークなものであった。色々な視点があることが、建築の意味を豊かにすると考えたため、あえて作品の優劣を強調しなかった。そして人間の新たな認識と生の場として、今後も建築は一つのきっかけであって欲しいとも思った。

優秀賞

花尻純

繻／残石の景

石切り場という場所性、それは採石によって刻々と大地が削られ変容していく現場である。そこに残された、ある意味捨てられた石を用いて、大地の欠損を埋め合わせるようなシェルターが、繊細な架構によりもたらされている。圧縮されるのではなくテンションに釣り合う重しとして、新たな修景を生み出している。

優秀賞

中崎佑香

共生への建築－神田のモリを建てる

歴史的に上書きされてきた街の地層的に埋もれた痕跡、それらを再度実空間として歴史横断的に再生し、結合させること。記録や記憶であった場が、未来に向けた新しい経験のステージに転換するところに面白さを感じた。

優秀賞

照井遥仁

疎に向かうまち、拡がる庭と大きな環境のイエ

地域のオーガナイザーとして、生活者でもある建築家が中心に設定されている。もはや現実が、こうした提案に追いついている事例もあると思われるが、それだけにリアリティを感じさせる。減築により共有スペースを結びつけていく手法は、一つの定型となるように思われる。

優秀賞

来間海人

二重螺旋の家族ごっこ

二重螺旋の構造体の中に自然と開放された共有空間を入れ込むことにより、従来の血縁家族像から拡張された、家族的つながりの場を構想。新たな生態系とも言える諸生物との共存が、プリミティブな生活感を喚起させた。

奨励賞

日高一輝

これからの文化的で最低限度の生活－1.7kmの水道道路沿い線形都営住宅列の再編－

現状、手持ち無沙汰な地上階のヴォイドスペースを持つ、いわゆる団地が延々と連なっている。今となっては人影も少なく寂しげな風情だが、そのヴォイドを水平、垂直につなぐことによって、人々が歩いて巡る楽しげな境界性を提示している。

奨励賞

鹿田萌々香

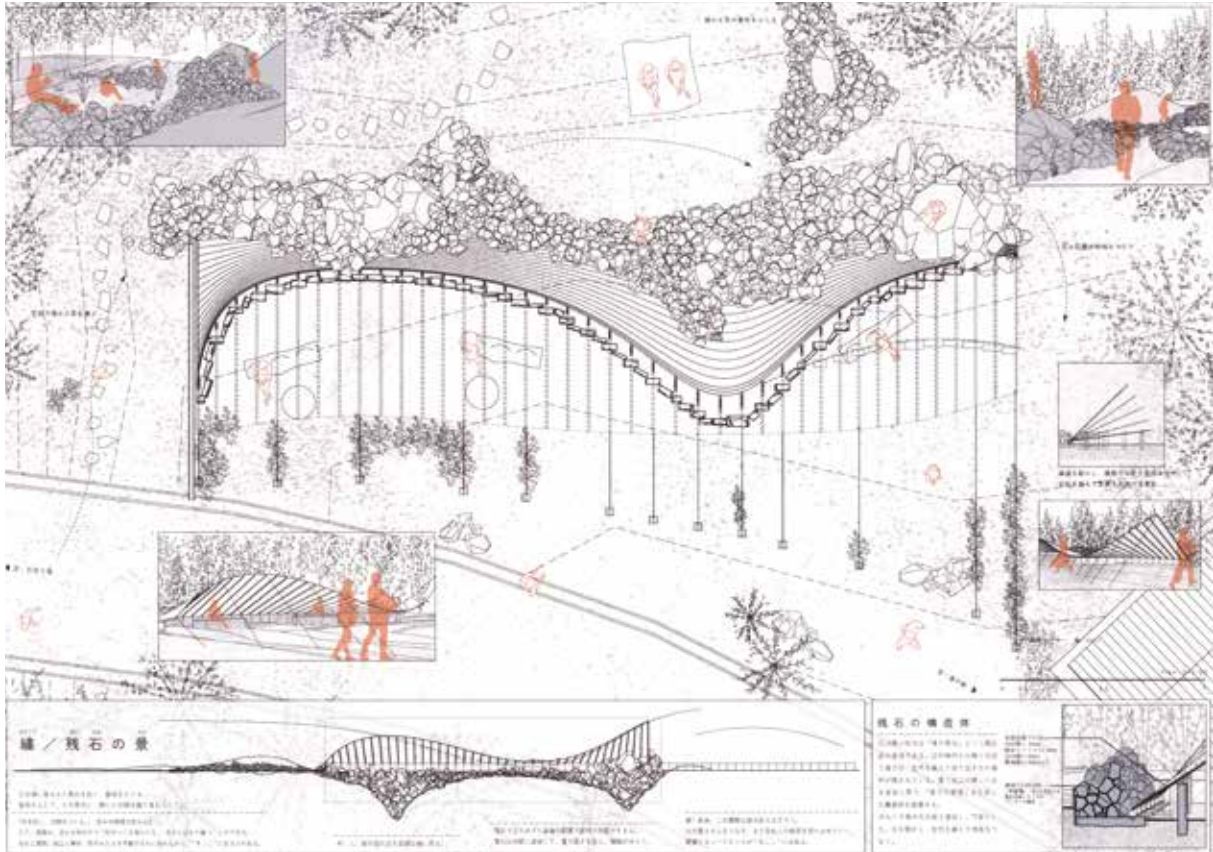
SHIMBASHI GROWTH TOWER

一見、トリッキーなショーケースの印象を持ったが、従来の人々が商品の間を巡る大型店舗に対して、ショーケースが色々な空間を横断していく様は、都市に対する新たなショーウィンドーとなって、都市と商空間との開放的な結びつきをもたらすように思われた。

デザイン賞

優秀賞

繡／残石の景



花尻 純 早稲田大学 大学院 創造理工学研究科 専攻分野／建築学専攻
Jun Hanajiri

共同制作者 大森 康正
Kousei Oomori

石切場に積まれた残石を拾い、屋根をかける。
屋根の上と下、その両方に、開いた空間を織り重ねていく。

「材を拾い、空間をつくる。」 営みの原理は変わらない。

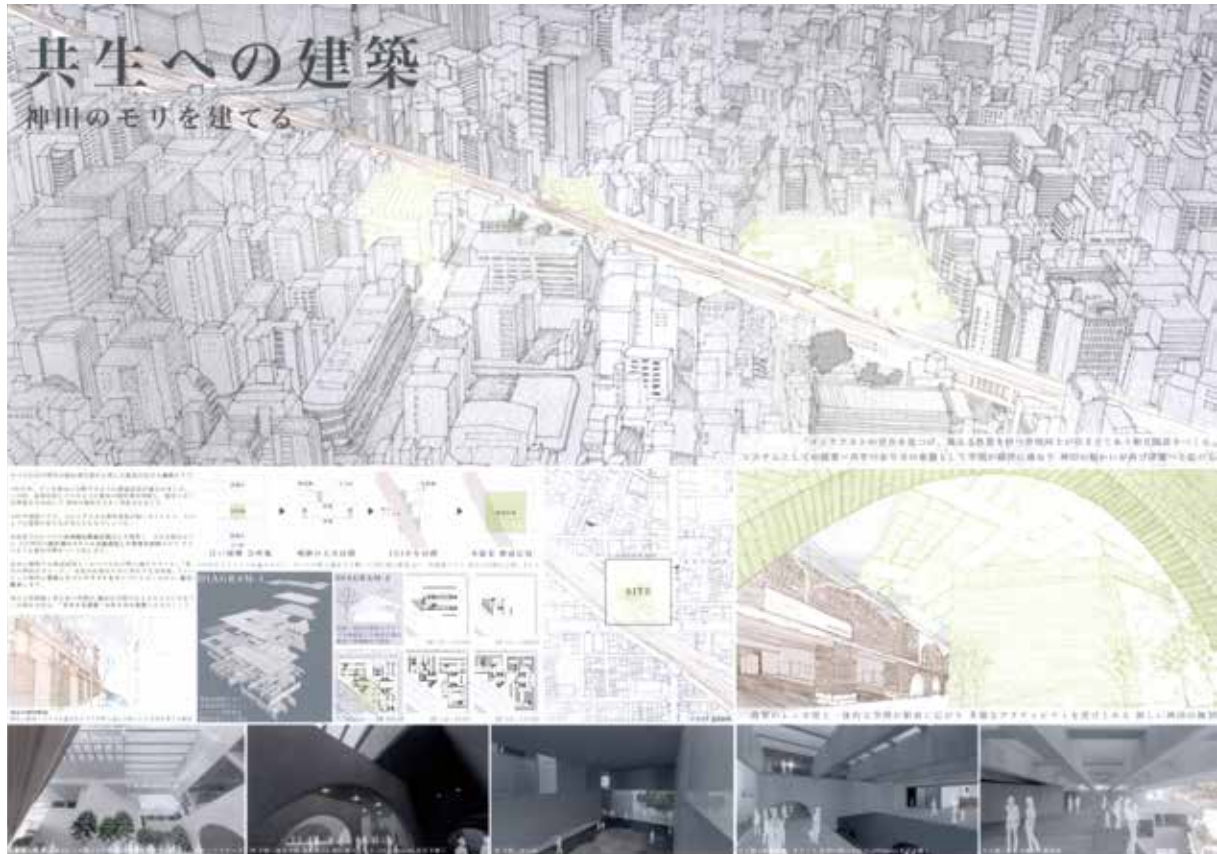
建築は、流れる時の中で「材がつくる姿かたち」を少しばかり保つことができる。
劣化と摩耗、組立と解体、時のもたらす平衡のさわに揺

れながら、“今ここ”に在る力がある。

材、人、時の揺れ目を屋根は縫い取る。

残石で立ちあげた基壇の配置で屋根の勾配がきまる。
重石は勾配に追従して、量や高さを変え、稜線がゆらぐ。

遠い未来、この建築は姿を変えるだろう。
石の重さが人をつなぎ、まだ見ぬ人の時間を受け止めていく。
重層するシークエンスが“今ここ”にはある。



中崎 佑香 フリーランス
Yuka Nakazaki

かつての江戸時代の街区割を僅かに残した風景が広がる神田エリア。

1919年、そこを斜めに分断するように鉄道高架が通されました。

この時、高架は消しゴムのように既存の街区割を切断し、多くの三角敷地を生み出して 神田の風景を大きく変化させました。

100年超経った今、再び大きな都市変化が起こるとしたら、どのような建築の在り方が考えられるでしょうか。

本提案ではかつての会所地を駅前広場として再生し、そ

れを囲むように 江戸時代の街区割のスケールを抽象化した壁梁を積層させ モリのような都市空間をつくり出します。

斜めに横断する鉄道高架と「かつての江戸町人地のスケール」「現代の神田のグリッド」「未来の広場のために再生する会所地」といったこの場所に蓄積したコンテクストをオーバーレイしながら、統合・継承します。

異なる時間軸と質を持つ空間が 相互に空間の良さを引き立たせあうこの設計方法は、「共生する建築」の在り方の象徴となるでしょう。



照井 遥仁 横浜国立大学 大学院 都市イノベーション学府 専攻分野／建築都市文化専攻建築都市デザインコース
Haruhito Terui

バブル期に最盛期を迎えた地方都市は人口減少時代を迎え、従来の都市計画・都市更新の方法では根本的な解決にならない。こうした地方都市では建築をどう“つくる”かということではなく、どう“減らす”かということを考えるべきである。

敷地は秋田県男鹿市をモデルに考える。中心市街地の街区を調査すると、住人の減少と高齢化によって街区の内側の建物はほとんど利用されていないことがわかった。

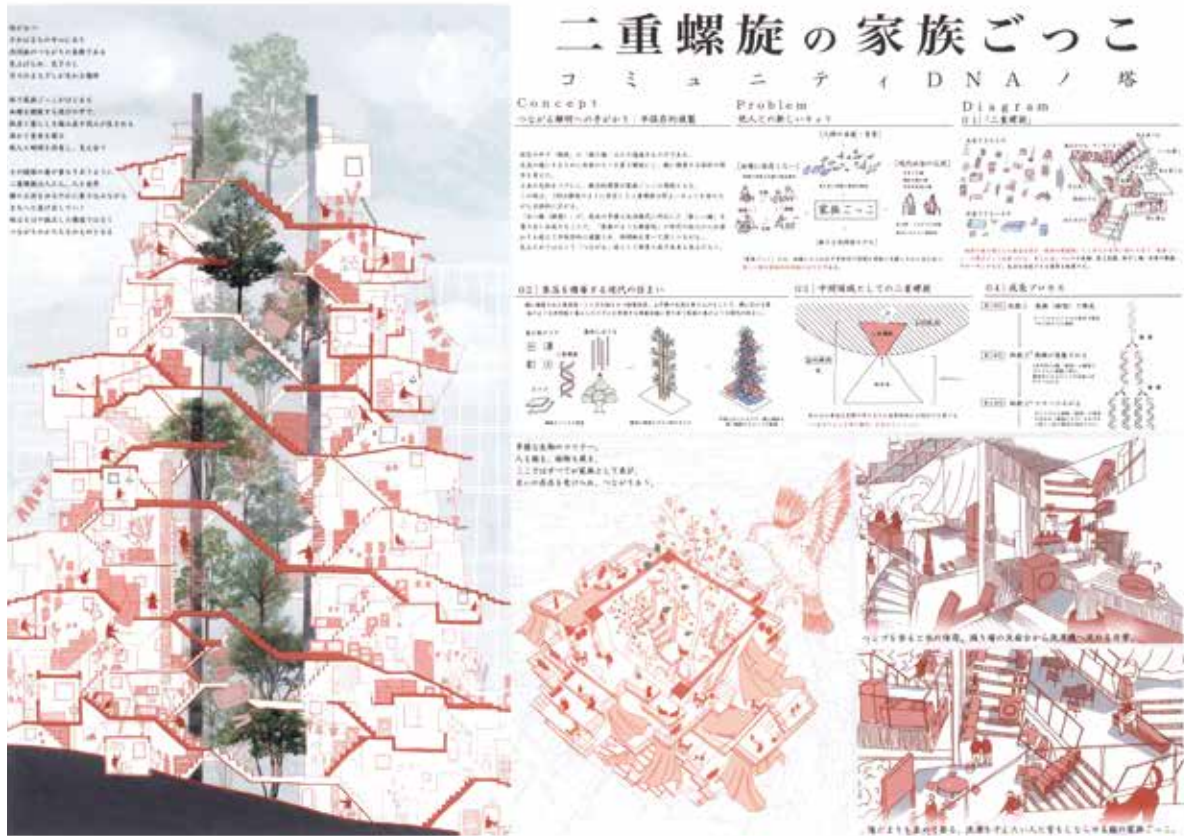
本提案ではこの敷地にローカルアーキテクトが参画する

ことから始める。街区を分断する敷地境界の塀や空き家を解体しながら場を構築していく。男鹿の街の人と建築家が共に場をつくる物語である。

人口が減り、街が疎になっていくことを肯定することによってこの街の風景を紡いでいく。つながる建築とは近代以降に失われた浜辺をもう一度総有するこの物語そのものであり、場をつくるアクターの一人として建築家がいるということを提案したい。

優秀賞

二重螺旋の家族ごっこ



来間 海人 大和大学 専攻分野／建築学専攻
Kaito Kuruma

共同制作者 横内 稀人
Kirito Yokouchi

「つながる」解明への手がかり：半保存的複製
住宅の中で「階段」や「踊り場」はただ通過するだけである。
交流の場にするために共有のモノを置き螺旋にし、縦に積層する塔状の都市を考えた。
4本の支柱をコアにし、樹木的建築が家族ごっこの領域となる。
この塔は、「古い鎖（鋳型）」が、現在の多様な生活様式に対応した「新しい鎖」を導き出し合成することで、「家族のような親密性」が世代や住人の入れ替わりを超えて半

保存的に複製され、時間軸を貫いて深くつながる。
DNA構造のように安定した二重螺旋は程よいキヨリを持ちながら立体的に広がる。
見るためではなくて「つながる」塔として群景と成す未来も来るだろう。

デザイン賞

奨励賞

これからの文化的で最低限度の生活

—1.7kmの水道道路沿い線形都営住宅列の再編—



日高 一輝 芝浦工業大学 専攻分野/建築学部建築学科SAコース
Ikki Hidaka

戦後の日本が発明した「安定した人生設計」と「効率的な住居設計」は、日本を高度経済成長期へ導いた一方で、「標準」というルールを逸脱したもの達に対する社会的レッテルを生み、今もなおその分断は埋まらずにいる。本提案では、渋谷区北部に架かる水道道路沿いに建ち並ぶ社会的資産である「都営住宅」改修によってシビルミニマムを、そして産業的資産である「若きクリエイター」の空間的支援によって人々の「これからの文化的で最低限度の

生活」を再編する。町を空間的、社会的に分断していたコンクリート造の都営住宅にポラスな減築を行い、居住者、地域住民、クリエイターの関りしろの形成と、耐震性能の向上を図りながら、関係性を持たなかった棟どうしの間に木造スロープの増築を行うことで、物理的につながながら、居住者間をバリアフリー化、フェーズフリー化によってつなげ、上階にもパブリック空間を設けることで地域とのつながりも生み出す。

奨励賞

SHIMBASHI GROWTH TOWER



鹿田 萌々香 鳥根大学大学院 自然科学研究科 専攻分野/環境システム科学専攻 建築デザイン学コース ■共同制作者 桂藤 快晟
Momoka Shikada Kaisei Keitou

かつて個人商店が立ち並んでいた通りは今やチェーン店に置き換わり、高層化によって人と人が自然に交流する環境は失われつつある。地価の高騰はそれを加速させ、小規模な個人店は姿を消し、店主と客、店主同士や客同士のつながりを希薄化しているのではないだろうか。本提案では、売買空間「プラットフォーム」と制作の場「アトリエ」に店主と客をあえて集約することで、同じ目的を持つ人々を物理的につなぎ直し、さらに両者を行き

交う商品棚型モビリティによりそれらを混ぜ合わせることで、想定していなかったようなつながりを生み出すという計画である。プラットフォームで生まれたクリエイター同士のつながりとアトリエで生まれた客同士のつながりを店舗型モビリティがさらにつなぎ合わせることで、店主と客、商品のジャンルを超えた新たな交流の仕方を提案する。

公益財団法人 ユニオン造形文化財団

■事務局

〒550-0015 大阪市西区南堀江 2-13-22

TEL.06-6532-8764 FAX.06-6533-1028

<https://www.uffec.com>